

## 土偶とは何か 一結髪土偶と縄文社会一

白石 哲也

山形大学 学術研究院 准教授

### はじめに

2020年度に、山形大学附属博物館所蔵の結髪土偶(愛称、「結髪ちゃん」)の左脚が接合された。普段、博物館などで展示されている土器や石器は、ほぼ完全な形に復元されていることが多い。しかし、通常、発掘で出土した考古遺物は破片の状態で見つかることが多く、整理の際にそれらの接合作業を行う。必ずしもすべての破片が揃うわけではないが、一つひとつの破片を丁寧に観察して、復元していく重要な作業である。これら復元された資料が、博物館で展示されることになるのである。一方で、別の遺跡や遠く離れた地点の資料が接合することがある。これは、通常の整理作業とは別に研究者による調査・研究を通じて、発見されることが多い。今回の結髪ちゃんの復元も會田容弘氏の優れた観察眼によって結実した結果であろう。

さて、會田氏や寒河江市教育委員会、ほか多くの方々の協力を得て、佐藤琴氏を中心とした山形大学附属博物館によって、90年ぶりに復元された結髪ちゃんであるが、そもそも結髪土偶とは何であろうか。いや、そもそも土偶とは何なのか。なぜ、土偶が製作されたのか。復元された結髪ちゃんを観察していると、実に多くの疑問が湧いてくる。そこで、本稿では結髪ちゃんを中心に、結髪ちゃんが製作された縄文時代を概観しつつ、どのようなプロセスを経て結髪ちゃんが歴史の舞台に登場したのかを考えることにしたい。

### 1. 縄文時代・縄文文化

結髪土偶とは何か、ということを考える前に、まずは縄文時代についておさらいしておきたい。なお、本稿は研究者向けの論文ではないので、できるだけ平易に解説することを心掛けるつもりだが、まれに専門用語を使用することがあるので、ご容赦頂きたい。

さて、「縄文時代」という時代は、中学や高校の教科書を読むと、「縄文土器が使用された時代を縄文時代と呼ぶ」ということになっている。この定義自体は、概ね正しいと言える(江坂・芹沢・坂詰2020)。ただ、縄文土器だけをメルクマールとしてしまうと、実は出現当初の土器には縄目が無い。さらに、縄文を転がした土器は一部では古墳時代まで継続している。だからと言って、弥生時代や古墳時代が縄文時代になるわけではない。

例えば、古墳時代以前の弥生時代の土器について、教科書では、「弥生土器は縄文土器に比べて丁寧かつ縄目の無い土器」と説明されるが、東日本の弥生土器の多くは縄目を

持つ。そもそも、はじめて弥生土器と認定された東京都文京区弥生町遺跡出土土器は縄目紋様がある。つまり、縄目の有無だけでは、縄文土器ということはできないのである。そこで、現在では縄文時代について、「日本列島における土器の出現を持ってはじまりとし、終わりは灌漑水田農耕の開始とする」という考えが主流になっている。そのため、ひとまず縄文土器は縄文時代に作られた土器と考えた方が理解しやすい。

では、土器の出現を重視した立場に立って、縄文時代という時代の開始を捉えると、現時点で最古の土器は青森県大平山元I遺跡から出土しており、約1万6500年前のC14年代値が得られている。一方で、終わり(弥生時代の開始)については、近年、国立歴史民俗博物館を中心とした研究チームにより、約3000年前というC14年代値が示されている。この値は、従来よりも大幅に年代が遡ったこともあり、現在まで論争となっている(藤尾2015ほか)。ただし、あくまで北部九州での開始年代であって、水田稲作の開始を弥生時代とした場合、地域ごとに開始年代のズレが生じている。顕著なところでは、東北地方で最も古い水田遺跡である青森県砂沢遺跡では約2400年前のC14年代値が与えられており、北部九州とは約600年の幅が存在する。つまり、日本列島全体が縄文時代から弥生時代に一気に変化したのではなく、徐々に変化(弥生化)していったと捉える方が良い。

だが、上述したように縄文時代は約13000年の存続期間があり、その間に社会はゆるやかではあるが変化していった。この変化は、土偶の変化にも影響を与えていたようである。そこで、紙面の都合上、概略ではあるが、縄文文化の変遷をみていくことにしよう。なお、縄文時代は土器の変化に基づき、古い方から草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6時期に区分される。ここでは、これらの時期ごとに様相を確認することにする。

### **草創期(約1万6500年前から1万1500年前)**

旧石器時代から縄文社会への移行期と言える。温暖化が開始する前には土器が出現(約1万6500年前)し、約1万5000年くらいから温暖化が始まり、弓矢の利用なども行われる。約1万3000年前くらいになると遺跡数も増加し、住居跡も見つかるようになる。最初期の土偶が出現するのもこの頃で、三重県粥見井尻遺跡や滋賀県相谷熊原遺跡から見つっている。この時期の地球環境は、急激な温暖化に見舞われており、針葉樹林が落葉広葉樹林へと変化したことで、縄文時代のメジャーフードのひとつであるドングリ類などの利用も始まった。

### **早期(約1万1500年前から7000年前)**

この時期は、気候の急激な温暖化に伴い、新たな環境適応として本格的な定住化や食糧資源の増加、そして貝塚形成がはじまる。なかでも、定住が本格化したことで地域差が生じ、地域的な特性にあった食糧資源の利活用などが行われる。また、イノシシなどを対象とした動物祭祀の発達なども見られるようになる。同時に、出土する土偶も急増する。

**前期(約7000年前から5500年前)**

気候が最も温暖で、海岸線の上昇から海岸線が現在の栃木県栃木市あたりまで入り込んでいた(縄文海進)。その後は、低温化し安定した気候になり、人口も急増する。この背景には、低湿地の利用が進み、クリなどの食糧管理施設の構築や千葉県域の大規模貝塚群に代表されるように、海産資源の利用が拡大したことが考えられる。

**中期(約5500年前から4400年前)**

人口が最も増える時期で、日本列島全体でおよそ26万人以上いたと考えられている。縄文社会の成熟期を迎え、火炎土器のような派手な土器や多くの土偶が作られるようになり、精神文化の高まりが認められ、縄文文化の世界観が確立する。また、新潟県糸魚川市流域で産出されたヒスイが威信財として広域流通し、集落をまとめる首長層のような「特別な人物」が出現するなど、社会階層の芽生えが認められる。

**後期(約4400年前から3300年前)**

中期から後期にかけて、気候の急激な寒冷化があり、中期までの社会・文化構造に大きな変化が生じる。その結果、中期のような大規模な集落が減少し、代わりに小規模な集落が点在するようになる。加えて、東日本に遺跡が集中していた中期に比べ、後期になると西日本でも遺跡が確認できるようになり、東から西への人の移動もあったことが考えられる。このような自然環境の変化に伴う人の移動によって、広域ネットワークなどがつくられ、祭祀形態に多様性が生じるようになる。

**晩期(約3300年前から2800年前)**

晩期は、長い縄文時代のなかでは非常に短い。この時期、東北地方北部では有名な亀ヶ岡式土器や遮光器土偶が作られる。その一方で、晩期の開始から200年後には北部九州において灌漑水田稲作が導入される。この稲作農耕の開始と連動して、亀ヶ岡式土器文化圏では西日本の情報を得るための動きが認められ、新たな時代への幕開けを示唆する。

以上、概略ではあるが縄文時代は非常に長く、多様な社会・文化を生み出してきたことをご理解いただけたと思う。こうした縄文社会・文化のなかで、約1万3000年間作られ続けた土偶は、どのように変化してきたのだろうか。次節では、土偶の変化を追いつつ、結髪ちゃんの登場を探ることにはしたい。

**2. 縄文土偶の変遷過程と結髪ちゃん**

土偶は、縄文人の精神的 세계観の現れであり、地域や時期によって、様々な形態があり、その出土量や特徴も異なることが明らかになっている。三上徹也(2014)は、そのようななかで、一貫した特徴として、「短い腕・脚」と「十字形」を指摘する。ここでは、三上の指摘を踏まえた上で、時期ごとの土偶の特徴についてみていくことにしたい(図1・2)。

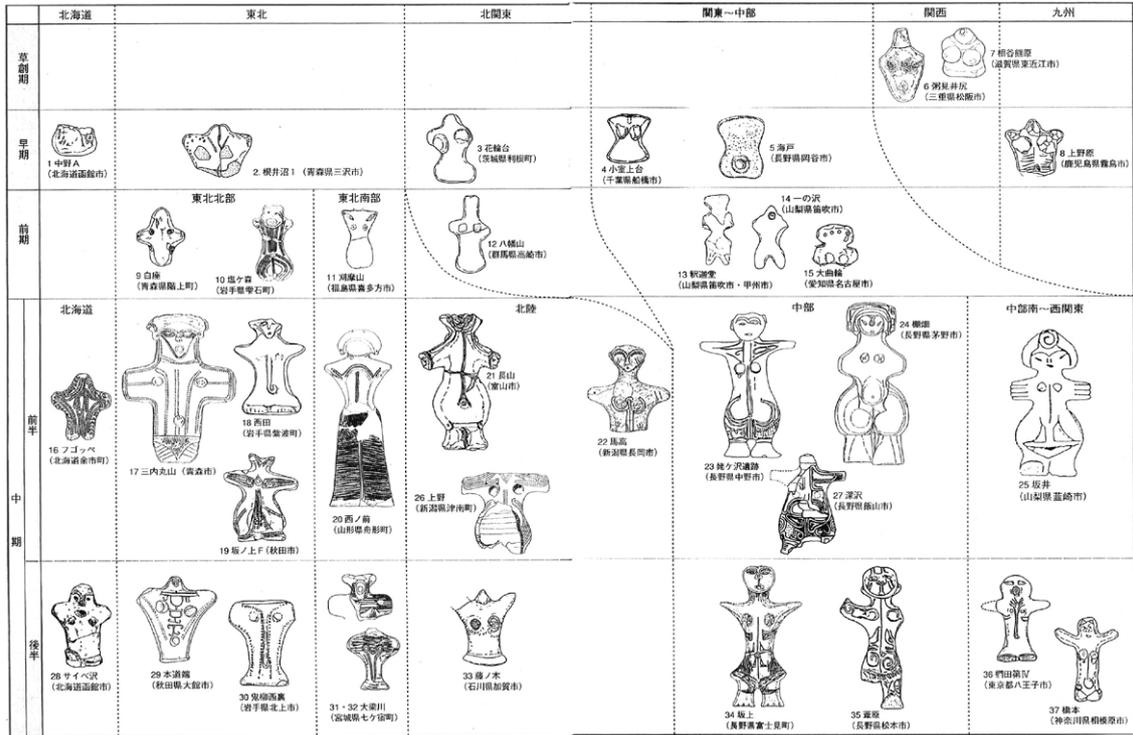


図1 代表的な土偶の編年と系統 縄文草創期～中期(三上2014)

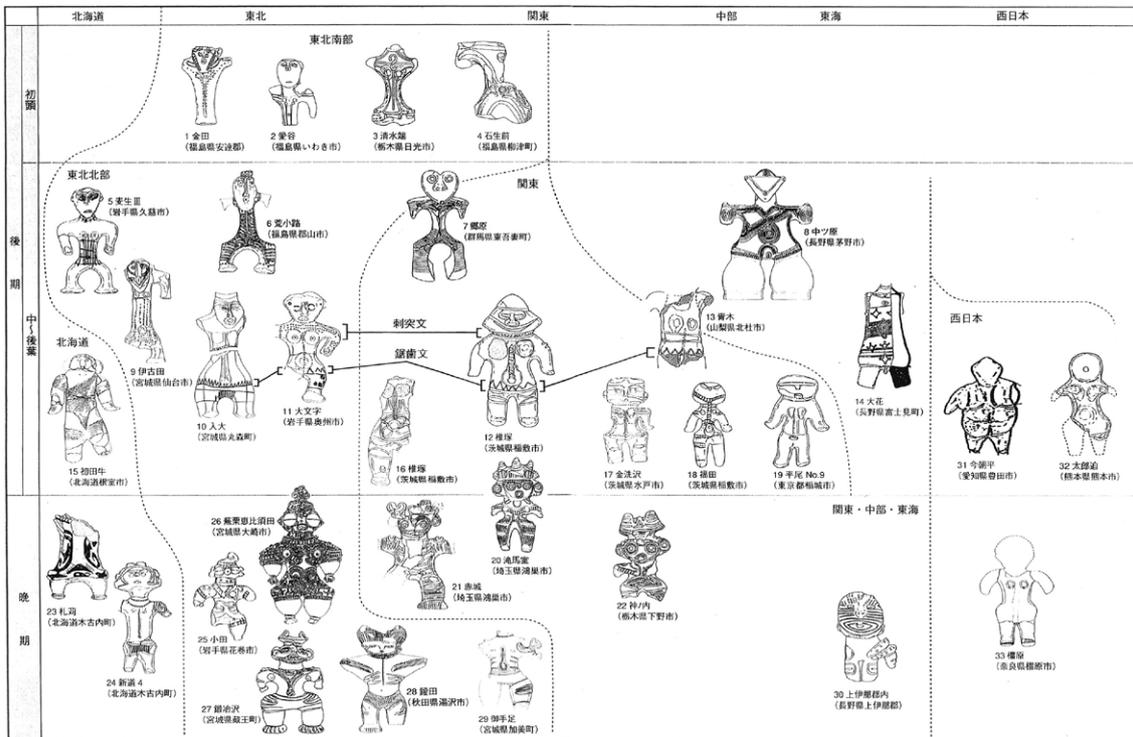


図2 代表的な土偶の編年と系統 縄文後期～晩期(三上2014)

## 草創期～中期(図1)

草創期は、三重県粥見井尻遺跡と滋賀県相谷熊原遺跡から小さな土偶が出土している。特徴としては、肩の張り出しや乳房の表現が見られる程度である(6・7)。しかし、早期になると北海道から南九州まで広い範囲で土偶が確認されるようになる。ただし、その特徴として形や大きさについては、草創期の土偶と大きな差はなく、脚や顔面表現が無い(1～5、8)。また、日本列島の南北にわたり、その形態が類似するという特徴がみられる。

その後、前期になっても形態に大きな差異は認められない(9～15)。ただし、釈迦堂遺跡(13)や一の沢遺跡(14)などでは、一部脚のような表現を持つものが出現する。また、分布範囲は早期に比べ縮小し、中部地方以西ではほぼ見られなくなる。

中期になると、縄文文化の大きな変化とともに、土偶も変化する。その方向性としては、前期までの土偶は小型・板状が一般的であったが、大型・立体へと向かう。また、全国的に共通した特徴を持っていたが、この時期になると地域ごとに特徴を持つようになる。具体的には、東北地方北部から南部に分布する、顔面表現を持つような十字形土偶(16～19)、中部高地を中心に広く分布する、お尻を突き出す特徴を持つ出尻土偶(23～25)などがある。山形県舟形町の西ノ前遺跡から出土した「縄文の女神」(20)は、後者に含まれる。

## 後期～晩期(図2)

最盛期を誇った中期縄文社会であったが、その終末から後期初頭にかけて、社会の停滞とともに土偶も激減し、一時的な断絶を伴う。その後、しばらくすると、それまでの土偶出土中心地であった東北や中部高地から関東へと中心地が変わり、中期までの土偶とは形態的にもやや異なる特徴を有するものが出現するようになる。

最初に現れたのは、顔面形状が特徴的なハート形土偶(7・8)である。細く長い胴体とO脚まがいの脚といった個性的な特徴を有しており、そこから山形土偶(12)、ミミズク土偶(20～22)へと変化していく。ミミズク土偶は、晩期のはじめ頃まで継続する。

一方で、東北地方では晩期になると有名な遮光器土偶(26)が登場する。遮光器土偶は、1887年に発見された考古学界でも大きな注目を浴びた土偶で、楕円形の区画中央に横一線を引いた目が特徴的である。名称の由来は、この目がエスキモーなどが用いた雪に反射する光よけに用いた眼鏡(遮光器)と解釈されたことによる。その後、遮光器土偶が簡素化して「結髪土偶」が出現する(28)。結髪土偶は、赤彩と大きなアーチ状の髪型と赤彩が特徴で東北から北海道に分布する。結髪ちゃんは、土偶の伝統的な「短い腕・脚」と「十字形」を守りつつ、縄文時代の終わりに東北から北海道の縄文時代の人々によってつくられたことがわかる。

## おわりに

ここまで、結髪ちゃんを中心に縄文社会・文化の様子を概観していくなかで、土偶の変化をみてきた。そこからは、結髪ちゃんが縄文文化の終わり頃に登場した遮光器土偶の系譜を引きながら、東北縄文文化の一員として登場したことがわかった。

また、結髪ちゃんをはじめとする土偶は、縄文時代草創期から長く縄文文化のなかで作り続けられた重要な精神的遺物である。残念ながら縄文時代の人々に、土偶を製作した意図を聞くことはできないが、そこに残された小さな痕跡から「縄文時代における土偶とは何か」ということを考えていくことはできる。今回、結髪ちゃんの足が復元されたことで、きっと新たな気づきが生まれるはずである。もう一度、多くの人に結髪ちゃんを見学して頂き、縄文時代に思い耽って欲しいと思う。

### 参考・引用文献

- 江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一2020『新日本考古学辞典』 ニューサイエンス社  
井口直司2018『縄文 土器・土偶』 KADOKAWA  
江坂輝彌2018『日本の土偶』 講談社学術文庫  
小林達夫(編)『季刊考古学』第30号 雄山閣  
三上徹也2014『縄文土偶ガイドブック』 新泉社  
藤尾慎一郎2015『弥生時代の歴史』 講談社現代新書  
山田康弘2019『縄文時代の歴史』 講談社現代新書  
MIHO MUSEUM(編)『土偶・コスモス』